

1. チングルマ

春、北大植物園の見所のひとつに高山植物園があります。ここでは様々な高山植物が咲きます。また、非公開のバックヤードでは道内各地から集められた高山植物を鉢で栽培・系統保存しています。2018年度の植物園だより（シリーズ⑳）では、本園で栽培している道内の主要4山系（大雪、日高、知床、夕張）のうち大雪山系で見られる植物について紹介します。

バラ科のチングルマ（*Sieversia pentapetala*）は、高山の湿潤なお花畑などで主幹から次々と枝を出しマット状に広がる小低木です。漢字では珍車、または稚児車と書き、これは実の形が子供の風車に見えるため、稚児車から転じたと言われていました。

自生地では、7～8月に咲き、長さ10～20cmの花茎が直立し、茎頂に2～3cmの白色の花を1つ咲かせます。倒卵状円形の花弁5枚が水平して開き、雌しべと多数の雄しべがあり、花が終わると花柱が長さ3cmほどに伸び、軸は長い白毛を生じて羽毛状となります。葉は7～9個の小葉を互生してつける羽状複葉で、小葉は狭倒卵形で先端は尖っています。長さは6～15mmで縁には不揃いな切れ込みと鋸歯があり、深緑色で艶があります。道内以外にも本州中北部の高山帯のほか、千島、サハリン、カムチャツカ半島、アリューシャン列島まで広く分布しています。

高山植物園では、南側の水路沿いで見る事が出来ます。5月上旬頃から咲き始め一面に白い花を咲かせた後、6月中旬以降には白い羽毛状の実が広がります。また、高山植物園東側の展示棚にも鉢物で展示しており、花の様子を間近で見ることができます。



チングルマ (*Sieversia pentapetala*)

2. チシマキンレイカ

スイカズラ科のチシマキンレイカ (*Patrinia sibirica*) は、高山帯や礫地、岩地に自生する多年草です。日本での分布は北海道だけですが、千島、サハリン、シベリア東部にも自生しています。漢字では千島金鈴花と書き、これは、自生地と黄色い花の姿からきています。

根出葉はさじ形で羽状に深く裂け、その中心部から高さ 10~15cm ほどの茎が立ち上がり、両側面に一条ずつの白毛が密生しています。茎の葉は長楕円で基と先は尖り、やや羽状に中裂した葉を対生して付けますが、茎の最下部に付く葉は倒卵状くさび形で縁に不整な鋸歯があります。茎の上部の花枝の下に付く葉は、苞葉状で短い柄を付け、卵形または皮針形で羽状に深裂しています。花枝は枝分かかれして小型で黄色の花を傘が開いたように一面につけます。花冠は鐘形で先端が 5 裂して径 4mm ほどに開き、4 つの雄しべが花冠から突き出しています。この花のようすを粟のごはん粒にたとえ、女飯の意味から「オミナメシ (オミナエシ)」の名が付いたと言われていいます。別名タカネオミナエシとも言い、漢字では高嶺女郎花と書きます。

環境省が作成・公表しているレッドリスト(日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)によると、チシマキンレイカは、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの(絶滅危惧IB類(EN))に選定されています。かつては、オミナエシ科に分類されてきましたが、DNA情報を用いて推定された最新の分類体系(APG分類体系)ではスイカズラ科に変わり、これが現在の世界基準となっています。

本園では、6月頃に咲き、高山植物園東側の展示棚で展示しています。



チシマキンレイカ (*Patrinia sibirica*)

3. メアカンキンバイ

バラ科のメアカンキンバイ (*Sibbaldia miyabei*) は、北海道の高山帯の砂礫地と千島列島に自生している多年草です。漢字で書くと雌阿寒金梅と書きます。和名のとおり、雌阿寒岳で発見され、梅の花に似た黄色い花を咲かせることから名付けられました。

地下に太い根茎が横に広がり、根茎頭から葉を根生しています。長さ1.5~4cmの葉柄を持ち、先端に小葉を3枚、手を上げた感じでつけます。葉柄の基部にある托葉は、長さ12~15mmで披針形をしており、先端は鋭頭になり、半分以上は葉柄と合着します。長さ5~12mmの小葉はくさび形で、表は灰緑色、裏は緑色をしており、先端は3個のあらい歯牙があります。長さ3~10cmの茎は斜上または這い、古い葉の葉柄に包まれて木質化します。茎の先端に径15mmほどの黄色い花を数個付け、花弁は倒卵形をしています。5つある萼片は披針形で先端は短く尖っています。また、同型の副萼片も5つあり萼片よりやや小さいです。花後には、長い毛のある瘦果をつけます。自生地では、7~8月頃咲きます。

メアカンキンバイはかつて、キジムシロ属 (*Potentilla*) に含められ *P. miyabei* と命名されましたが、その後の研究によりタテヤマキンバイ属 (*Sibbaldia*) のタテヤマキンバイ (*S. procumbens*) と系統的に近縁種であることが明らかになり上記学名に改められました。

本園では、6月頃に咲き、高山植物園東側の展示棚で展示しています。環境省が作成・公表しているレッドリスト（日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）によるとメアカンキンバイは、絶滅の危険が増大している種（絶滅危惧II類（VU））に選定されています。

本種学名の種小名には「*miyabei*」と本園の初代園長である宮部金吾の名が付いています。これは学名が発表された当時、北海道、千島列島の植物研究を行っていたことで献名されたものです。



メアカンキンバイ (*Sibbaldia miyabei*)

4. ヒメイワタデ

タデ科のヒメイワタデ (*Aconogonon ajanense*) は、高山帯の砂礫地に自生する多年草です。小さく可憐な姿形をしていることから名付けられました。漢字で書くと姫岩蓼と書きます。日本での分布は北海道ですが、千島、サハリン、シベリア東部、中国（東北）にも自生しており、別名チシマヒメイワタデとも言い、漢字では千島姫岩蓼と書きます。

茎は細く直立、または多少湾曲して時に分枝します。高さ 10~30cm ほどになり、無毛または伏毛があります。長さ 2.5~7cm、幅 4~15mm の葉は厚く卵状披針形~披針形で、先は鋭形か鈍形をしています。葉は両面に短い伏毛があるか、表面にだけ毛がありません。托葉鞘は膜質で外面に長い毛があります。総状花序は円錐状に集まり、自生地では 7~8 月頃、淡緑色した花を咲かせます。長さ 3.5mm ほどで褐色したそう果は 3 稜形をしていて艶があります。

環境省が作成・公表しているレッドリスト(日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)によると、ヒメイワタデは、絶滅の危険が増大している種(絶滅危惧 II 類 (VU))に選定されています。

本園では、高山植物園に植栽しており 6 月頃に咲きます。また、高山植物園東側には、同じオクタデ属 (*Aconogonon*) の仲間のウラジロタデ (*A. weyrichii*) が植栽されています。ウラジロタデには根茎があり、高さ 30~100cm にもなります。また、葉の表面は深緑色ですが裏面には白い綿毛を密生しています。ヒメイワタデが、雌雄同株(雄花と雌花が同じ個体)であるのに対し、ウラジロタデは雌雄異株(雄花と雌花は別々の個体)です。ヒメイワタデは淡緑色をした地味な印象の花を咲かせる一方で、ウラジロタデの白色の総状花序は一見して華やかさを感じさせます。開花期は若干違いますが来園された際には見比べてみて下さい。



ヒメイワタデ (*Aconogonon ajanense*)

5. タカネクロスゲ

カヤツリグサ科のタカネクロスゲ (*Scirpus maximowiczii*) は、高山の湿った草地に自生する多年草です。漢字で書くと高嶺黒菅で、高山に生え、根本が黒色を帯びることから付けられました。別名ミヤマワタスゲとも言い、漢字では深山綿菅と書きます。北海道、本州中部以北のほか、千島、サハリン、朝鮮半島に分布しています。

高さ 15~30cm になる茎は直立し 1~3 節あり、基部に葉を付けます。幅 3~6mm の根出葉があり、長さ 3~4cm の葉鞘は茎をゆるく包みこんでいます。長さ 3~7cm の葉身の上方は帯黒色をしています。長さ 3~5cm の花序は、1~2 回分枝してざらついた枝の先に付き、一方に傾いています。長さ 7~10mm、幅 3~4mm で黒灰色した小穂は長楕円形をしていて、長さ 3.5~4mm の膜質の鱗片があります。長さ 5~6mm の刺針があり、上端には上向きの小刺針がまばらに生えています。

環境省が作成・公表しているレッドリスト（日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）によると、タカネクロスゲは、絶滅の危険が増大している種（絶滅危惧 II 類 (VU)）に選定されています。

本種はミヤマホタルイ (*S. hondoensis*) などと同じホタルイ属 (*Scirpus*) です。名前も姿も似たものに、ミヤマクロスゲ (*Carex flavocuspis*) がありますが、こちらはカヤツリグサ科スゲ属 (*Carex*) です。

本園では、6~7 月頃に咲き、高山植物園東側の展示棚で展示しています。また、ミヤマクロスゲも展示していますので、機会があれば是非来園し、見比べて下さい。



タカネクロスゲ (*Scirpus maximowiczii*)

6. エゾノタカネヤナギ

ヤナギ科のエゾノタカネヤナギ (*Salix yezoalpina*) は、大雪山系、日高山系、夕張山系など北海道の高山帯に分布する小低木です。北海道の高山帯に生えるヤナギという意味で、漢字では蝦夷高嶺柳と書きます。

枝は這うように広がり、小枝は無毛で平滑で光沢があります。枝端の若葉や中間葉には両面に長さ 2~4mm の白色長軟毛が密生しますが、成葉は両面とも無毛です。長さ 2~5.5cm、幅 1.5~4.5cm の葉はふつう広楕円形をしているが、倒卵状広楕円形または円形のものもあり、先端は円形ないし鈍形をしています。表面は深緑色で艶があり、葉脈がはっきりと凹入りしていて、裏面は帯粉白色で葉脈がはっきりと隆起しています。葉柄は長さ 1.5~3cm で、はじめ長毛が散生しますがすぐに無毛になります。自生地では 6~7 月頃、円柱状の花穂に密に花を付け、雄花穂は長さ 3~4cm、径 1~1.5cm、雌花穂は長さ 2.5~4.5cm、径 0.7~1.2cm と雌花穂は若干小さめです。

環境省が作成・公表しているレッドリスト(日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)によると、本種は、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの(絶滅危惧 IB 類 (EN)) に選定されています。

本園では 5~6 月頃咲き、高山植物園で見ることが出来ます。通路脇すぐのところの植栽されています。開花期に来園された時には、立ち止まってご覧下さい。また、高山植物園には、同属のヒダカミネヤナギ (*S. hidakamontana*) やミネヤナギ(ミヤマヤナギ *S. reini*) も植栽していますので見比べて下さい。



エゾノタカネヤナギ (*Salix yezoalpina*)